研究ノート

学園内所蔵資料の研究利用促進に向けた初歩的検討と試行
―デジタルアーカイブ化を意識した未整理資料調査と概報作成―

A Preliminary Study on Promoting the Use of Digital Archives

近藤 尚子 *　田中 直人 **　中村 弥生 ***　関口 光子 ****
Takako Kondo, Naoto Tanaka, Yayoi Nakamura and Mitsuko Sekiguchi

要旨

実物資料研究において、多くの類例を参照し得ることが核心的に重要であることは、論を俟たない。本研究は、学園内所蔵の未整理資料の情報を、研究素材として研究者間で共有することを目的として、その概報（資料の概要を伝え、利用者に精察を促すための情報）の作成と公開を進めようとするものである。概報の作成では、より多くの資料が公開されることを重視して、利用者による追加調査にゆだねるべき情報は掲出しないこととした。つまり、利用側の研究利便と公開側の作業負担のバランス点を探すことで、効率的な情報提供の手法を模索しようとするのである。本稿では文化学園ファッションリソースセンター所蔵の一群資料（雑誌『装苑』掲載資料）を調査し、そこに得られた情報から試行的に「資料画像」、「製作年代」、「製作者」を選び、もって概報とした。今後、概報利用者からのフィードバックを集め、研究利便と作業負担のバランスをみながら再調整を進め、より適切な概報のあり方を探ることとしている。またこの手法を確立することが、学園内の未整理資料の研究素材化を進める一助となると考えるものである。

●キーワード：服飾資料（clothing and fashion resources）/『装苑』（So-en）/ デジタルアーカイブ（digital archives）

Ⅰ．研究の背景

服飾分野における実物資料を研究素材として扱う際に、我々は異なるふたつの視角を無意識に使い分けている。ひとつは資料の特質を大掴みにし、その背後にある時代性や他資料との間にある系譜関係を見出さんとする視角、つまり資料としての「位置付け」を確認する作業であり、もうひとつは資料を細部まで丁寧に観察し、その単体が有する特質を掴み取ろうとする視角、つまり資料としての「意義付け」を行なう作業である。これら視角は服飾文化研究に限られるものではなく、様々な資料の調査・研究の場において広く一般的に、また不断に用いられるものであるが、ここではとりわけ服飾文化研究における資料情報について考えてみたい。

これらの視角は、資料情報を取得する際に求められる「環境」においても相違がある。前者は、例えば意匠のあり方のように、近似する多くの資料との比較によって評価がなされる傾向にあることから、閲覧可能な資料の総数が多いこと、またそれらを鳥瞰できることが求められる。よってここでは、大量の情報を一度に取得、閲覧することが可能な「デジタルデータ」との親和性が高いといえよう。一方の後者では、衣服でいえば素材の別、技術の質といった、仔細に観察することで得られる情報が重視されるため、対象資料を様々な手段を用いながら複眼的、また多角的に調査ができる環境が求められる。ここでは資料一点の有する情報について、時間をかけて余すところなくすくい取ろうとするため、「実物」を実際に見られることが望ましいといえる。

こうした視点の相違は一般に「鳥の目・虫の目」との言葉で表現されることもある。つまるところ我々は鳥の視点でものを概観することで問題の所在を確認し、検討すべき対象を見定め、虫の視点をもってそれら対象資料を精察することで微細な気付きを積み上げ、新たな概念を構築するための素材としている。そうした広狭両様の確認、検討の過程を行きつ戻りつしながら仮説を立て、それを検証してゆくことが、資料に向き合う際の基本的な営みであるということができよう。

以上、一般論の確認に字数を費やしてきたが、本論で述べようとする「初歩的検討と試行」とは、ここに示す「鳥の目」の充実を意図するものであり、今後本学園内でも進んでゆくであろう教育・研究情報の共有基盤整備の一助となろうとするものであることを、冒頭においてまず確認しておきたい。

*　文化学園大学教授　日本語学　　**　文化学園大学准教授　歴史学
***文化学園大学研究員　保存科学　　****文化学園大学短期大学部助教　被服造形学

Ⅱ．概報作成の経緯とその意図

資料研究において、より多くの事例を参照することが問題の提起や検討資料の選定における大きな助けとなることは論を俟たない。そこで本研究では、学園内に所蔵される様々な実物資料のなかから、いまだ未整理のままとなっている資料について、その情報を研究者間で共有することを目的として概要の公開をおこなうものである。

概要は、先述した「鳥の目」に供するものであるため、まず優先されねばならないのは可能な限り多くの件数を積み上げることである。また同時に、研究者本人による「虫の目」の調査機会が後に控えることから、そちらにゆだねるべき情報については調査せず、掲出もしないと判断することも重要であると考えている。

本稿では、都合63件の資料の概要を紹介するが、仮にこれについて多角的調査をおこない、得られた事がらを詳細に情報化し公開しようとすれば、相当程度の時間と労力を要することとなる。ここではこれを概要にとどめ、可能な限り共有資料の件数を増やそうと考えるのである。つまるところこれは、利用側の研究利便と公開側の作業負担のバランス点を探すことで、真に効率的な情報提供の手法を模索しようとするもの、ともいえよう。[1)]

これを進めるためにまず必要となるのは、必要情報を過不足なく発信するための大まかな目安作り、である。上述したように、デジタルデータにて提供されるべきは資料の位置づけを確認し得る特徴であり、換言すれば、一点ずつ手に取ってなされる精察に向けた導引としての概要情報（以下、概報という）である。ここに如何なる情報が掲出されるべきかについては、こうした観点からなされる情報公開の例が殆どないこともあり、簡単には示し難い。そこで本稿では試行的に、調査にて記録した事がらのなかからとりわけ、「資料画像」、「製作年代」、「製作者」を選び、これを概報とした。

これら3点を挙げたのは、利用者が類例を並べ比較、検討する際に、いずれも欠くことのできない情報であるためである。一方、これら以外の情報については寸法、状態を記録しているが、これらは問題関心の所在により捉え方がまちまちであるため、利用者自身によって直接調取されるのが適当と考え、概報から除外すべきと判断した。

なお、ここに示す概報はあくまで試案である。利用者からのフィードバックを集めて、研究利便と作業負担のバランスの再調整を進めることが、今後予定する研究における主要な課題であることを付け加えておきたい。

Ⅲ．概報化資料の概要と所蔵機関

本稿作成に先んじて、文化学園ファッションリソースセンター（以下、リソースセンターという）所蔵の一群資料（以下、雑誌『装苑』掲載資料という）について、基礎的な調査とともに情報の概報化をなした。

同資料は学校法人文化学園の出版業務専従部局である文化出版局の刊行する雑誌『装苑』にて、ほぼ半世紀前に企画、製作され、実際に記事として掲載された資料である。雑誌『装苑』については後述することとし、以下では、収蔵機関であるリソースセンターについて、その概要を説明したい。

リソースセンターは、大学および文化服装学院の附属機関として1999年7月に開設された。テキスタイル資料室（布地のサンプルを系統的に保有）、映像資料室（過去のコレクションなどのファッションに関する映像資料を保有）、コスチューム資料室（現代の服飾関連の実物資料を保有）、企画室（デザイナー、企業との連携活動、展示・講演会等のイベントを企画）の4部門で構成されている。こうした多彩な情報を収集、分析、提供し得るセンター機能は、国内の教育諸機関においては殆ど類例がなく、書誌資料を中心に収蔵する附属図書館、世界各地の近代以前の実物資料もあわせて所蔵する服飾博物館とともに、服飾文化研究の情報拠点を形成している。[2)]

またリソースセンターの資料の性質と保管資料の公開状況についても略記しておきたい。同センターでは実物およびその関連資料によって教育・研究を支援する目的から、現代の服飾資料を中心に収集を進めている。資料を手に取って見られることが大きな特徴であり、学内外の多くの研究者および学生がこれを利用している。なお、文部科学省より「服飾文化共同研究拠点」として指定を受ける本学では、学外研究者に資料の共同利用のための門戸を開くが、同センターも拠点の中核施設のひとつであるため、共同研究員の登録がなされていればその利用申請をおこなうことが可能である。[3)]

さらに、国内の服飾資料の収集事情から看て取れる、同センターの有する価値についても一言しておきたい。それは戦後から現在にかけての大衆向けファッションに関する資料を収集し、保管している事実である。国内の収蔵機関のなかで、現代の資料を収集の柱とする機関は必ずしも多くない。この事実が示すのは、日本の服飾を考える際に重要な示唆を与えるであろう戦後資料の蓄積は必ずしも多くなく、また今後それが増えてゆく見通し

も、現在の状況からは立てづらい、ということである。戦後70年余りの市井のファッションを再現し得る資料をリソースセンターが保有することは、戦後から現在にいたる日本の服飾教育のなかで果たした本学園の役割を考えたとき不可欠のことである。その意味においても、同センター所蔵の貴重な資料群を積極的に公開してゆくことが求められていると考えるのである。

Ⅳ．雑誌『装苑』掲載資料の概報化

今回見つかった「雑誌『装苑』掲載資料」は、1958～1974年に刊行された雑誌『装苑』に掲載された衣服141点、段ボール箱13箱分である。1950・60年代が4箱、1970年代が9箱あり、各資料には、現在の所蔵機関であるリソースセンターによって分類番号・資料番号・掲載年が記載されているタグが付けられていた。タグ記載情報に基づく雑誌『装苑』掲載年別点数を図1に示す。図1より、1970・71年掲載の資料だけで全資料の約51%を占めることが分かる。

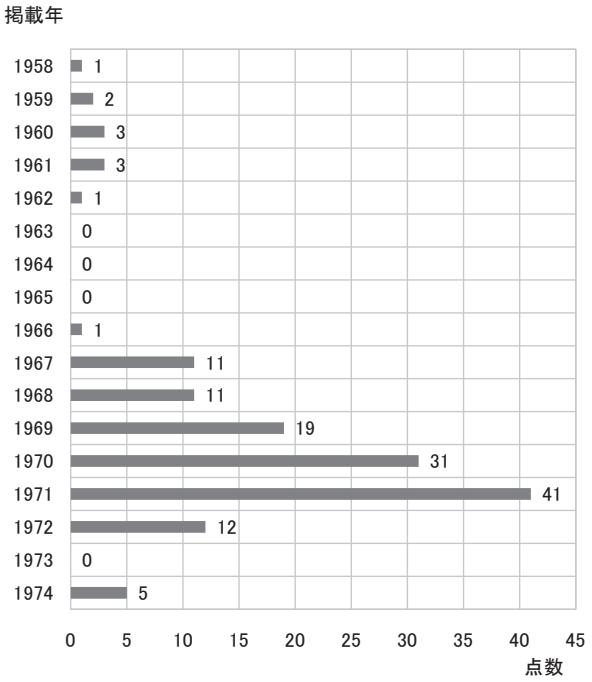

図1　雑誌『装苑』掲載資料の掲載年別点数

まず、雑誌『装苑』について述べる。雑誌『装苑』とは、1936年に「服装の改善とその普及」を目的に服装研究雑誌として創刊された、約80年の歴史がある雑誌である。そのため、着用目的・素材別・体型別といったテーマに合わせ衣服をデザインし、その衣服の製図や製作する時の注意点などを掲載していた[4)]。雑誌『装苑』のバックナンバーについては、一部欠けている号はあるが、附属図書館で所蔵されており、いつでも閲覧できるようになっている。また、国立国会図書館にも所蔵されており、1948～1982年に刊行されたものについては、国立国会図書館デジタルコレクションで目次検索をすることが可能となっている。

次に、調査について述べる。本研究では、「雑誌『装苑』掲載資料」の概報作成のため、資料写真・寸法・雑誌『装苑』掲載情報・資料状態の4項目について記録した。現時点で全141点の調査は終了しておらず、上記4項目全ての調査が終了した資料63点について、分類番号と雑誌『装苑』掲載年月・頁とその資料をデザインしたデザイナー名を表1に示す。

実物調査から得られた「雑誌『装苑』掲載資料」の特徴は、細身に作られていることと資料状態が良好であることである。採寸の結果、ウエストサイズが60㎝未満の資料が資料全体の約10%あり、資料写真の撮影時に使用したサイズ78（バスト78㎝・ウエスト57㎝・ヒップ82㎝）のディスプレイ用レディスボディ（東京キイヤ製）に着せ付けられないほど細身の資料もあった。また、資料状態に関しては、傷み・欠損のある資料がほとんどなく、多くの資料が経年劣化と思しき退色がみられる程度であった。しかし、当時の生地メーカーが開発した最新生地を使用している資料も多く、今後の保管方法を検討する必要があると考えられる。

そして、「雑誌『装苑』掲載資料」の最大の特徴は雑誌『装苑』に掲載された衣服であるという点にある。通常衣服の実物資料がある時、「製作年代」や「製作者」が判明することは稀で、古い資料になればなるほどその傾向が強く、製作年代や製作方法を考察すること自体が研究となることが多い。しかし、「雑誌『装苑』掲載資料」はおよそ半世紀前の衣服ではあるが、その特徴から、製作年代・デザイナーだけでなく、デザインテーマや各衣服のデザイン意図、実際の着こなしや製図、製作要点も確定情報として得ることができる。一例として、分類番号SE. 303（佐々木重デザイン）の雑誌『装苑』掲載の製図頁を図2に示す。分類番号SE. 303（佐々木重デザイン）は雑誌『装苑』1967年10月号の107頁に掲載された衣服であることが確認された。まず大きなテーマ、ここでは「アンゴラプリント」があり、その中の4着目の衣服でデザイナーが佐々木重、使用している布地はミニオンファブリック水本であることが分かる[5)]。また、製図頁では、製図と要尺が記載されている（図2）。

表１　雑誌『装苑』掲載資料の掲載情報

分類番号	雑誌『装苑』掲載情報					
	掲載年月		掲載頁			デザイナー
	年	月	モデル着用	資料説明	製図	
BL. 227	1959	6付録	付録39	付録39	付録119	会和子
SK. 347		8	8	8	189	芦田惇
JA. 103	1960	7	62	62	付録108	貝淵悦子
ON. 219		9付録	付録33	付録33	付録58	森英恵
SK. 166		11	10	10, 11	付録92	水野正夫
CO. 239	1962	9	119	119	付録128	笹原紀代
SU. 00500	1966	付録8	付録39	付録38	付録103	佐藤昌彦
ON. 677	1967	3	75	75	235	芦田惇
SU. 466		5	128	128	273	中山保子
ON. 527		6	64	65	264	笹原紀代
SK. 349		6付録	付録98	付録98	付録98	川上繁三郎
SE. 303		10	107	106	276	佐々木重
			105	105	257	米山ヒデミ
ON. 537		11	105	105	257	鹿間弘次
SU. 00565		11付録	付録57	付録57	付録123	宮美代子
ON. 288	1968	4	56	56	239	米山ヒデミ
SU. 952		4付録	付録17	付録17	付録104	黒田明子
ON. 783		5	165	165	281	米山ヒデミ
ON. 674			168	168	283	宮美代子
SU. 00566		9	68	68	−	水野和子
ON. 366		10	102	102	276	小林治子
SU. 00082	1969	4	62	62	260	川上繁三郎
BL. 136			105	105	287	菊池武夫
BL. 128		5付録	付録4	付録5	付録102	黒田明子
SU. 224		6	4	4	255	菊池武夫
PA. 32		6付録	付録84	付録84	付録84	西村治瑯
PA. 33			付録84	付録84	付録84	永井賢次
BL. 192		7	58	58	211	川上繁三郎
SU. 00585			77	77	217	宮美代子
ON. 547		8	15	15	195	山県清臣
ON. 546			22	22	193	西村治瑯
BL. 147		8付録	付録49	付録49	付録72	山県清臣
ON. 545		10	34	34	261	諸岡美津子
SU. 293		10付録	付録3	付録3	付録104	水野和子
CO. 304		11	14	14	223	山県清臣
CO. 294		12付録	付録19	付録19	付録95	山県清臣

分類番号	雑誌『装苑』掲載情報					
	掲載年月		掲載頁			デザイナー
	年	月	モデル着用	資料説明	製図	
CO. 223	1970	3	8	8	215	万国谷武人
BL. 148		4	54	55	224	山根淳
ON. 693		5	44	44	222	芦田淳
SU. 271		6付録	付録51	付録51	付録51	山根淳
SU. 971		10	13	13	218	安東武男
ON. 559			76	76	235	山根淳
ON. 369		11付録	付録19	付録19	付録96	山県清臣
ON. 359		12	33	33	199	河村重
ON. 562	1971	1	表紙	4	244	山県清臣
CO. 268			10	10	247	山県清臣
SU. 149		2	38	38	262	山根淳
CO. 185			14	15	252	川上繁三郎
ON. 375			95	95	283	山根淳
ON. 386		3	49	49	281	仁田敬也
ON. 831		4	66	66	302	原田茂
ON. 579		5	71	70	279	鈴木紀男
ON. 803			149	148−149	312	山根淳
SU. 273		8	63	63	254	仁田敬也
ON. 840		9	10	10	241	菊池武夫
EN. 363		10	8	9	268	君島一郎
JA. 39			9	9	267	宇喜多正平
JA. 40			129	129	240−241	西村治瑯
CO. 299	1972	2	47	47	284	宇喜多正平
SU. 135		10	89	89	209	宇喜多正平
ON. 454	1974	4	91	91	231	滝沢久仁子
SU. 974			85	85	223	おかもと和子
ON. 393			89	89	224	吉羽恒夫
SU. 988		5	132	132	228	伊藤公

資料によって情報量は統一されておらず、他にモデル・撮影者・ヘアメイクの氏名や、アクセサリー・カバン・靴といった小物についてメーカーの記載があることもある。このように資料単体の情報量の多さには目を見張るものがあり、さらに他頁より当時の時代背景も読み取ることができるため、一歩踏み込んだ研究を期待できる希少な資料群であると考えられる。

被服・ファッション分野の研究では、大きく分けて実物資料自体に関する研究（材料、染色・整理、環境・衛生、構成、意匠など）と実物資料周辺に関する研究（被服心理、服飾史、服飾文化、教育など）がある。今回発見された「雑誌『装苑』掲載資料」は、前述したとおり実物とそれに対応した雑誌『装苑』が存在するため、そのどちらの研究分野からもアプローチしやすい資料である。そのため、素材分析、保存・修復、原型・製図・人体サイズの歴史、デザイン（形・色・模様）研究、デザイナー研究、日本ファッションの歴史、日本ファッション文化研究、流行調査など多岐に渡る研究が想定され、

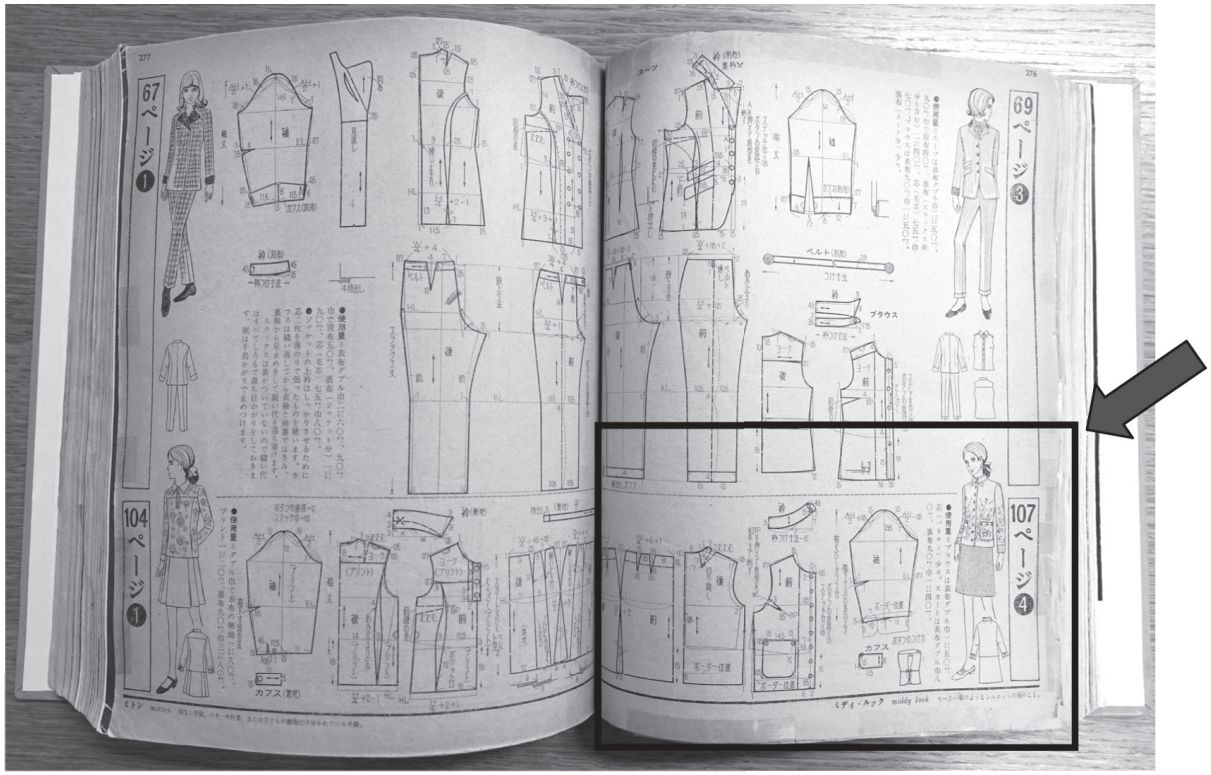

図2　雑誌『装苑』掲載の製図（分類番号 SE. 303　佐々木重デザイン）

戦後の日本ファッションを多角的に分析し得る。引き続き今回発見された資料を調査するとともに、まだ見ぬ雑誌『装苑』に関連する資料の発掘に力を入れたい。

V．おわりに

最後に本稿で述べたことの今後の見通しについて確認しておきたい。本学園には資料管理を専当する機関は勿論のこと、各研究室にも少なくない数の未整理資料が存在する。それらが積み増される理由には、日常業務の繁忙さに起因する様々な可能性が考えられようが、より構造的な問題として指摘し得るのは、(1) 資料管理者と研究利用者の連携の不足（意見交換の場がなく公開すべき資料を定め難い）、(2) 情報を一元化し公開する機会および設備の不在、が挙げられる。

こうした問題のうちとりわけ (1) については、従来、個々の教職員、あるいは学生の自助努力により散発的な情報交換がなされており、それが資料の公開に繋がった例も皆無ではない。しかし、学園所蔵資料全体としての研究利用促進を図るには、こうした意思疎通を偶発的なものから恒常的な仕組みへと作りかえてゆく必要がある。また、これら仕組みの持続性を高めるには、合わせて (2) を克服すべく機会・設備をつくり、より多くの研究利用に応える状況を体制として整えるのが望ましいことも、恐らく異論のないところであろう。

本稿は、研究支援を職務とする文化ファッション研究機構に身をおく者として、また過去に服飾分野のアーカイブ調査を進めたことで僅かながらそれら考察の経験を有する者として、問題の解消のための参考に供するべく検討をなすものだが、こうした試行の事例が各所で積み上がることが、学園所蔵資料の研究利用を促進する力となると考えている。今後も同様の検討を進めるとともに、関係諸氏との意見交換をおこなってゆきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり資料提供頂いた文化学園ファッションリソースセンター、並びに文化出版局に感謝の意を表します。

なお、本研究は平成 29 年度、文部科学省「特色ある共同利用・共同研究拠点」における「和装文化共同研究」の研究課題助成を受けてなされたものです。

課題名「和装分野の未発掘資料の調査と保存―基礎調査とデジタルデータ化、および保存環境の改善支援―」

注

1) 文化ファッション研究機構、和装文化研究所では、平成27から29年度の3ヵ年にわたり、文化庁芸術文化課からの委託事業として、服飾分野におけるアーカイブ構築の現状について調査する機会を得た（「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」）。資料情報の共有において概要の作成が重要であることについては、この事業のなかでも検討し、その成果を報告している。
文化学園大学 和装文化研究所『アーカイブ中核拠点形成モデル事業（ファッションデザイン分野）最終報告書』（平成30年3月）

2) 『ファッションリソースセンターだより』№19（2012年4月）より抜粋。

3) 文化学園大学は、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」を平成20年に受託した。これに伴い「共同利用・共同研究拠点」としての認定も受け、服飾文化研究の拠点としての活動も担っている。共同研究員に対し図書館、服飾博物館、ファッションリソースセンターの3施設の所蔵する服飾関連資料の利用を許可している。

4) 『装苑』は、徐々に研究雑誌ではなくファッション雑誌の要素が強くなり、一時は製図が掲載されなくもなったが、2016年より「このブランドの製図が見たい!」という連載が始まり、現在では再び製図が掲載されている。また、新人デザイナーの登竜門である「装苑賞」というファッションコンテストが1956年より創刊二十周年を記念し開始され、今年度（2018年度）で第92回を向かえた。

5) 『装苑』掲載資料は、モデル着用画像と共にその衣服のデザイン意図も掲載されていることが多い。分類番号SE. 303佐々木重デザインの衣服では、「花束をたくさんかかえているみたい――。一丈プリントの楽しいブラウスです。きらきら輝く金ボタンとパッチドポケットつき。スカートはベージに黒のモヘア入り。」（1967年10月号106ページ）と記載されている。